



つたもの)が主で、木地を渋や弁柄、濃い赤茶色に下塗りし、上から透明漆を塗り木目を見せる春慶塗の技法によって作られているのが特徴です。河俣塗は元禄年間に日向国から河俣村にやってきた早田荘左衛門という人が始めたと伝えられ、江戸中期(一八世紀)には河俣村に何人かの指物職人が住んでいたことがわかっていますが、本格的に河俣塗が製作されるようになるのは初代・富岡仲平からです。延享四年(一七四七)に生まれ、腕の立つ職人であった仲平は、寛政五年(一七九二)に熊本藩の指物御用を命じられます。これ以降、富岡家は代々河俣塗生産の中心となり、藩の御用指物師として活躍するようになります。

天保七年(一八三六)に河俣村の指物職人十五人が記した起請文には、河俣塗の技術を秘伝とすること、丈夫かつ良質で美しい製品を作ることなどの製作ポリシーが記されており、この頃には河俣塗は村の代表的産業となっていたようです。また、この起請文の筆頭として名を連ねている三代目・富岡仲平は特に高い技

皆様、「河俣塗」ってご存知ですか？東陽村の県道二五号線を河俣川沿いに上ったところにある東陽町河俣ここで江戸・明治期に作られていた漆器を河俣塗といえます。製作されたのは足打膳や重箱などの指物(板を組み合わせて作

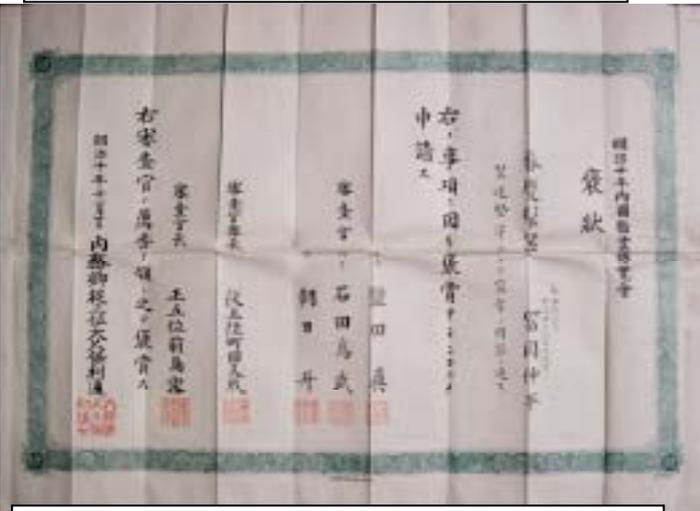
術を持っていたようで、明治十年(一八七七)六十九歳の時、第一回内国勲業博覧会に河俣塗の膳と重箱を出品し、明治政府から褒賞を受けています。河俣塗は明治以降も生産され続け、富岡家は大正期ごろに有佐に出張所を設け、生産拡大を試みましたが、社会の生活スタイルの変化により膳や重箱などの需要減少が影響したのか、昭和に入り廃業。ここに河俣塗の歴史は幕を閉じます。かつて八代を代表する産業の一つだった河俣塗ですが、現在の河俣地区に漆器生産の面影はほとんどなく、今となっては忘れられた「幻の工芸品」となっていました。しかし、河俣塗は江戸後期・昭和期にかけて八代地域ではかなり流通していたようで、さらにもともと丈夫で実用的な生活什器として作られているため、現在でも古いお家などでたまに見かけることがあります。



足打膳などの河俣塗。赤みを帯びた美しく丈夫な製品です。



河俣塗に捺されている印。いろんなバリエーションがあります。



3代目・富岡仲平への明治10年(1877)第1回内国勲業博覧会褒賞

河俣塗の見分け方は、製品の底裏部分に川俣(河俣)+作者名を記した印が捺されているかどうか(写真参照)。印がありそこに「川俣(あるいは河俣)」という文字があればそれは河俣塗です。もし古そうな漆塗りのお膳やお盆を見かけたら、とりあえずひっくり返して底裏を見てください。印は時代や作者によって多種多様ですが、その事例をたくさん集めることが、謎の多い河俣塗の実態解明のための大きな力となります。

近年、富岡家の歴史資料を寄贈していただいたのを契機に、博物館では河俣塗の調査を進めているところです。もし何か情報(家に残っている、など)がございましたら、博物館までご一報ください。